

# 音楽指導上の基本的な問題点

愛知学芸大学附属岡崎中学校 藤田 竜生

何をまず音楽指導上の基本的な問題点と考えるか、ということですが、私は私なりに次の4点について考えたいと思っています。

- (1) 教師自身の音楽の考え方・感じ方
- (2) 音楽への対し方・受けとめ方
- (3) 子どもたちへの指導の仕方(音楽のあつかい方)
- (4) 子どもたちのとりあつかい方

## (1) について

ごくあたりまえなことですが、音楽は「音による造形」であり「音による表現」であり「音による芸術」であるということをもっとよく実感したり、認識したりすることが大切ではないかと思えます。

## (2) について

音楽に対する対し方には、人によってそれぞれ「感覚型」とか「感情型」とか「理屈型」とかいろいろの型があり、また音楽の受けとめ方にも「教養型」とか「レクリエーション型」「生活型」「芸術型」などさまざまな型が見られます。しかし音楽教育・音楽指導という立場からは、方法的には「感覚型」がのぞましく、目的においては「生活型」がのぞましいように思えます。

## (3) について

### (1) 調性感の問題

短調について話す時、短調の曲は長調に比べて「さみしい」とか「悲しい」とかいたり、ラドミのどれかからはじまって、ラで終わっているとか、ソに#がついているとかいいます。そんなことが原因でしょうか。『蛍の光』『仰げば尊し』『オールド・ブラック・ジョー』『アロハ・オエ』などの曲をきかせますと短調と感じたり、『エリゼのために』『運命』『カチューシャ』『青い山脈』などのような曲を長調と考えたりす

る子どもたちが意外に多いことにおどろきます。また楽譜をみてもそれを音の問題として感じないで(これは読譜力の問題とも関連しますが)ただ楽譜上ソに#がついているか、ラで終わっているかということだけに注意をむける生徒が大部分のようです。しかし長調・短調・転調など調性の問題は、上記のような感情の問題でも単なる楽譜上の問題でもなく、もっとメカニックで感覚的な音そのもの問題ですので、指導にあたっては「音に対する感受性」「音楽を正しくうたったり聞いたりする能力」の問題としてあつかっていきのが正しいように思えます。

### (2) 読譜の問題

『楽譜が読めなくてもすぐにおぼえてしまう』『楽譜を見なくてもすぐうたえてしまう』というようなすぐれた音感を持っているのに、その力がなぜ読譜力として統一づけられ方向づけられないのか、考えてみれば不思議なことです。それには、音楽を作っている一つ一つの音を常にある組織(音階組織・和声組織等)の中の音として聞いたりうたったりする習慣や指導に欠けていたことが一つの原因ともなっているように思えます。階名そのものがすでに音の一組織につけられた名前であり、「移動ド唱法」そのものも調性感と相対音感の上になった読譜上の一方法であるということを考えてみれば、現状から見てわたくしたちの読譜指導には、大きな盲点のあったことが痛感されます。

「平易な音程とりズムによる短い旋律を聞き、それを反射的に階名唱する」(新指導要領)とか、任意の旋律をすぐに階名ほん訳するという力は、楽譜を音にする力と表裏をなすものですが、この力もまた単なる経験とか直観とかでなく、適確な調性感の上になつて、個々の音を有機的には握するということが基礎になっているようです。読譜指導を以上のような意味における音感指導として進めていきたいものだと考えています。(以下略)